

団長の心のものさし

指導者として
演奏者として
“心持”を！

演奏のテクニックは大事だが 演奏者の“心持”は 聴く人にもっと感動をあたえる

うたおにで指揮をするようになって12年。うたおにでの指揮活動以前から、合唱の指導に携わってきているので、もう指揮活動は28年くらいになると思う。もっとベテランは周りにたくさん居るので、まだまだ若輩者の部類なのだろうが・・・。

そんな僕が未熟ながら、折に触れ感じてきたことがある。それは“心持”という言葉、そしてそれを意識する姿勢だ。

前号にも書いたが、何をするにもそれなりの技術を要する。技術がなければ何もこなせないのである。僕は“刃物を研ぐ”ことによく例える。刃物は、切れ味を良くするために研ぐのである。では、研いだ刃物をどう使うのか？それが“心持”に当たるのだ。料理に使えば人々の幸せを演出できるであろう。しかし、人を傷つけば恐怖や悲しみを生み出す道具になるのだ。

.....

うたおにがコンクールに出て勝ちを意識していた頃、全国大会では十

分聴くに耐える演奏があった。好みは別としても、聴く人に爽快感を与える演奏が多々見られた。ところが、ちょうど全国で金賞に入賞し出した頃から、何か重苦しい雰囲気が立ち込めているコンクールを感じ始めたのだ。そこにはかつてのような爽快感、感動的な場面はなく、あたかも戦場のような様であった。おそらく全国レベルの合唱団の顔ぶれが変わり始めてきたことが大きな要因だろうと感じていた。

技術をひけらかすだけでは ただの暴力でしかない

ならば、このうたおにがその空気を変えるべくコンクールに参加し続けようという考えもないわけではなかった。現に、とある合唱指揮者から「うたおにさんが参加することでコンクールの流れは変わる」とまで言われた。いつも「リスクが大きいほど成果も大きい」と言っている僕にしては、そのリスクは背負い切れ

なかった。それはコンクールそのものが超絶技巧的な、難曲至上主義的な様相を極めて来ているからである。うたおにが、そこに逆らわない方向に転じて成果を挙げたことは、こちらの狙い通りであった。しかし、それは強い薬のようなもので、服用を続けることの出来ないことを、僕は確信していた。即効力はないが、飲み続けることで健康な体を維持できるサプリメントでなければダメだと。それが現在の活動に繋がっている。コンクールの効用は十分に理解できるし、それを享受して来たからこそ今のうたおにがある。この力を別の形で扱わなければ、ただの暴力だ。

語り継がれる記憶であれ

たくさん練習をして、その結果として勝つというご褒美を授かることで存在意義を確認してきた時代があった。残念なことにそうでもない限り、合唱活動を理解などしてもらえないと決め付けていたのではないだろうか？合唱に興味を持つ人など出来ない・・・。

答えは真逆のようだ。そうした姿勢が、合唱を大衆から切り離し、特別な人たちだけの、周りを寄せ付けない、特殊な世界に変貌させてしまっていないだろうか？たしかに上手くなった。格段にだ。一糸乱れずとはよく言ったものだ。どんな難曲でも、見事に演奏するのである。本家本元のヨーロッパの合唱団が驚くほどに、その精緻度は高い。

要は、歌に向かう“心持”だ。

なぜ歌っているのか。何のために歌おうとするのか。何を伝えたいのか。そうした姿勢を貫くことで、その人の心持が反映されるのだろう。無意味にテクニカルになることは、表現するための道具の、誤った使い方になり得ると痛感した。

コンクールから撤退して、一時敗北感のようなものを感じたことは事実だ。その後、たくさんの合唱や演奏家の演奏を見聞きし、この心持が実に演奏に重要な要素だということを目の当たりにしてきた。

これも“思い”を貫くということだろう。歴史に残すのは記録ではなく、語り継がれる記憶でありたい。

うたおにの6月3日(木)の様子

練習内容

「Mass From Two Worlds」より

Gloria

Hear my prayer, O Lord
Heaven In A Wild Flower
Geistliches Lied Oo.30

6月に入った。この活動を続けていると、本当に月日の流れるのが早いと感じる。ことし中盤はほとんど本番がない。だらける時期だ。合唱祭が近づいている。たかが6分。うたおにはどんな行事でも、そこで最高のパフォーマンスを見せなければならない。うたおにに権威はないのである。すべてその場の演奏だけなのだ。